のぞみ学級　　図画工作科学習指導案

令和６年１１月６日（水）５校時
のぞみＣグループ　　１０名
授業者　　T1
T2

研究主題：「自ら考え、伝え合い、学びを深める児童の育成」

～ICT 機器の活用を通して～

特別支援分科会　目指す児童像

「自分の意見をもち、適切な方法で伝え合おうとする児童」

１　題材名　「アニメーションを作って遊ぼう」　Ａ表現（１）ア、（２）ア　Ｂ鑑賞（１）ア
共通事項（１）ア、イ

２　題材の目標

カラフルなシールを台紙に貼り、それを少しずつ増やしながら次々にタブレットで撮影し、簡単なアニメーション作品に仕上げる活動を通して、造形的な楽しさを味わうとともに、作成中の会話や鑑賞を通して、教師や友達が作った作品のよさを感じ取ったり、考えたりしながら、自分の見方・感じ方を広げる。

３　題材の評価規準

観点	単元の評価規準
知識・技能	○シールを台紙に少しずつ貼り、それを次々に撮影することができる。 ○シールの数を増やしたり、貼る位置や色のバランスを変えたりすることが多様な作品につながるという、造形的な特徴に気付いている。
思考・判断・表現	○できた作品を再生して見直したり、友達と話し合ったりしながら作り変える活動を通して、イメージを膨らませ、自分の見方・感じ方を広げようとしている。 ○友達と作品を見せ合う活動を通して、造形的な良さや面白さを感じ取ったり考えたりしながら、自分の見方・感じ方を広げている。
主体的に学習に取り組む態度	○ペアになった友達と協力してシールを貼り、分担して写真撮影をする。 ○他の児童の作品のよさを感じ取って鑑賞する活動に楽しんで取り組んでいる。

４　指導観

（１）　題材観

本題材は，以下のような過程で行う造形遊びである。

①　台紙にカラフルなシールを貼る。
②　タブレットのカメラで撮影する。
③　①の台紙にシールを貼り足し、再びカメラで撮影する。①から③を繰り返す。
④　ストップモーション（映像処理ソフト）を使いアニメーション動画を再生する。
⑤再生して気づいたことを踏まえ、作り変えたい場合は修正する。

身近にあるシールや、やり直すことが容易なデジタル機器を使用することで、認知特性や協調運動の苦手さを抱える特別支援学級の児童にも取り組みが容易で、意欲的な学習につながる題材である。また、友達と作品を見せ合う鑑賞の時間では、多様な作品のよさに気付くなど、児童が自分の見方・感じ方を広げることにつながる題材である。

（２）教材観

特別支援学級においては、はさみやのり等の用具を上手に使えない、一度失敗してしまうと、やり直すのが困難である等の理由から、児童が図工に対して苦手意識をもつことが多く、教材選びに工夫が必要である。今回のシールを台紙に貼っていく活動は、比較的容易で失敗しにくく、思ったような結果が得られなくても、すぐにやり直すことができることが意欲的な学習につながると考えられる。

タブレットのカメラ機能は、何度も撮り直しができる長所があり、児童も普段の活動から、その使いやすさを理解している。アニメーション作成という課題も児童が興味をもって取り組めるものである。今回の活動は、二人組で協力して撮影したり、撮影台で台紙を固定したりと、撮影への負担を軽減している。

これらのことから、児童が作品作りに集中できることを期待している。

（３）児童観

本学級は、３年生１名、４年生４名、５年生２名、６年生３名からなる特別支援学級である。絵を描くことが得意な児童や折り紙の作品作りなどに進んで取り組める児童がいる一方で、それらに苦手意識をもっている児童も多い。普段の図工の学習でも、教師の教材見本の提示と、工程の説明だけで作業ができる児童もいれば、何をしてよいかわからず、教師が個別に具体的な指示をしないと作品作りに取り組めない児童もいる。

タブレットについては、他教科の学習でもよく使用している。国語の説明文や俳句単元では、Canva を使用して説明図や俳句を作る活動に取り組んだ。総合の学習の時間には、タブレットを使用して宿泊学習の思い出をランキング形式でまとめ、他学級の児童にプレゼンテーションするなどの活動をしている。タブレットを用いた写真撮影については、算数科で図形の敷き詰めの活動を記録する際に使ったり、宿泊学習のバスレクのクイズの作成などに使ったりしており、使い方には慣れている。

図工の鑑賞については、友達の作品を見て工夫やよさを見付け発表できる児童は一部である。ただ、考えをもっていないわけでは無く、それを表現できずに発表できないことが多い。そこで、児童の考えを言葉にしてあげるなどの支援をしながら鑑賞を行っている。

今回は、児童の図工の学習への苦手さを軽減し、自分ならではの発想を楽しんだり、友達の作品のよいところを伝え合ったりする学習を通して、ねらいに迫っていきたい。

５　本単元における研究主題に迫るための手だて

(1)　効果的な ICT 機器の活用の工夫

・タブレットのカメラ機能を使い、何度もやり直すことでよい作品に仕上げる経験を味わわせる。間違えても撮り直すことができるため、不安を感じずに表現を楽しむことができる児童が増えると考える。また、タブレットが自分の考えを表現する手段の１つであることを身近に感じることができ、活用方法を考える素地となると考える。
・ストップモーションを使用することで、簡単にアニメーション作品を作ることができる。不要な画像を削除したり、撮り直ししたりすることも容易である。
・事前に工程の説明動画を作製し、活動前に児童に提示するとともに、自分のタブレットでいつでも見られるようにドライブに保存しておく。

(2)　伝え合う力を育む指導の工夫

・ペア活動を行うことで、一人では困難な作業を分担したり、活動の中で「こうしたほうがいいよ。」「もっとシールを増やそうよ」等の会話がなされたりすることを期待している。
・言葉で伝えることが苦手な児童も、アニメーション作品にすることによって、単なる平面作品よりも、よりストーリー性の強いメッセージを発することが可能となり、友達に自信をもって伝えることができるようになる。
・鑑賞においては、自分のタブレットから閲覧用のフォルダ等に動画を送ることで簡単に作品を発表することができる。また、個々の作品への興味から活発な意見の交流ができる。

(3)　学びを深める指導の工夫（「振り返り」等）

・予備的な活動を含め、何度か同じ活動を取り入れ、自信をもって作品作りに取り組めるようにする。
・児童が理解しやすい説明動画を作製することで、完成までの見通しをもつことが苦手な児童の意欲を喚起する。
・振り返りには、紙のカードを用いる。スプレッドシートを使用した振り返りは、短時間で簡単に行える等の利点が、今回の研究で明らかになっている。しかし、本学級の場合、他の児童に影響されやすい児童の特性から、自分の意見をもてなくなる懸念がある。また１０名という少人数で行う学習であり、効率的な面は重視されない。そこで、単元のまとめにカード形式で振り返りを行うこととした。

6　単元の指導計画と評価計画（全３時間）

次	時	目　標	○学習内容・学習活動 □ICT 機器の活用（児童）	●評価規準（評価方法） ■ICT 機器の活用（教師） ★指導上の留意点
1	1 （本時）	・簡単なアニメーションを工夫して作ることができる。	○５×５マスのシール台紙に自由にシールを貼る。 □その様子をタブレットで撮影してアニメーション動画を作る。 ○1 つ作品ができたら次の作品を作っていく。 ○アニメーション動画を皆で見合う活動をし、今後の見通しをもつ。	●少しずつシールを貼って撮影を繰り返すという手順が分かっている。（知・技）【視線、表情、発声】 ■パラパラ漫画と手順を全体に示し説明を加える。 ★イメージがしづらい児童には、シールを貼る順番や場所の例を助言する。 ★シール台紙とタブレットを支える土台がずれないように支援する。 ■児童が撮った動画を電子黒板で流す。
2	2	・形や色などの造形的な視点に立って表現方法を工夫することができる。	○作りたいイメージをペアで話し合い、６×６マスのシール台紙にシールを貼って完成イメージを作る。 ○完成イメージを基にシールを順番に貼って埋めていき完成イメージまで作る。 □その様子をタブレットで撮影し、アニメーション動画を作る。	●シールの位置や数の増やし方などを工夫している。（知・技）【視線、表情、発声】 ●友達の作品を鑑賞し、自分たちの作品や友達の作品のよさに気付いている。（思・判・表）【視線、表情、発声】 ■冒頭、前時の振り返りで工夫が見られたアニメーション動画を取り上げ再度工夫して点を確認する。 ★シールのサイズや種類を多くし、表現の自由度を上げる。
	3	・発想や構想の違いを感じ取ったり、自分の見方や感じ方を広げたりしながら、作品をよりよくすることができる。	○新たな工夫を見て、作りたいイメージをペアで話し合い、６×６マスのシール台紙にシールを貼って完成イメージを作る。 ○完成イメージを基にシールを順番に貼って埋めていき完成イメージまで作る。 □その様子をタブレットで撮影し、アニメーション動画を作る。 ○発表するアニメーション動画を１つに絞り、皆で見合う活動を通して、作品がもつ連続性を捉える。	●友達の作品を鑑賞し、自分の見方・考え方を広げようとしている。（思・判・表）【視線、表情、発声、作品】 ●友達と協力しながら意欲的に取り組んでいる。（主）【視線、表情、発声】 ■都度、新たに工夫が見られたペアがいたら、全員の作業と止めてアニメーション動画を紹介し工夫を促す。 ★見通しが立てられない児童には、教員と一緒に方向性を考え支援する。 ■児童が撮った動画を電子黒板で流す。

7　本時（全３時間中の第１時）

（１）本時の目標

簡単なアニメーション作品を工夫して作ることができる。

（２）材料・用具

タブレット、円形シール（色数は複数）、シール台紙（５×５）、図工室の椅子、短冊

（３）本時の展開

時間	学習内容または学習活動	指導上の留意点・配慮事項	◇評価規準 ★個別の手立て ３年Ａ児、４年Ｂ児 ６年Ｈ児、６年Ｉ児	◇評価規準 ★個別の手立て ４年Ｃ児、４年Ｄ児 ４年Ｅ児、５年Ｆ児 ５年Ｇ児、６年Ｊ児	評価方法
導入 10分	① パラパラ漫画とアニメーションの作り方の手順を確認する。	・手順を確認後に質問を受け付ける。	◇ アニメーション作品に関心をもち進んで取り組もうとしている。 ★ Ｂ児に対し、動画視聴に質問をしないよう個別に説明する。	◇ 手順を理解することができる。 ◇ 分からないことは質問できる。 ★ Ｃ児、Ｅ児、Ｇ児に対し、動画視聴中に質問をしないよう事前に注意しておく。	視線、表情、動き、発声
展開 25分	① ５×５マスの方眼紙に自由にシールを貼り、その様子をタブレットで１コマずつ撮影する。 ② 上記①を繰り返し、工夫しながら作品を作る。 ③ 複数作品ができた場合は１点に絞り、作品データを共有ドライブに移動する。	・タブレット及び土台とシール台紙がずれないように台紙と机をテープで固定する。 ・作り方が分からない場合は、手を挙げて支援を求めるよう伝える。 ・無意識に工夫しているところを発問しながら引き出し言語化させる。	◇ 作り方が分かり取り組むことができる。 ★ Ｈ児の作業が遅れそうな場合は、教員が支援する。	◇ 作品を楽しみながら作ることができる。 ◇ 試行錯誤しながら表現を工夫することができる。 ★ わからない場合には自ら質問するよう促す。	視線、表情、動き、発声

まとめ 10分	① 作品の発表会をする。電子黒板に撮影したものを写し出し工夫したところを述べる。 ② 振り返りを行い、次の時間の活動の見通しをもつ。	・作品を絞り込んで発表する際、同じ工夫ができたかを確認することで他の児童にも達成感や充実感が感じられるようにする。 ・次回への見通しをもたせ、意欲付けをする。	◇ 友達の作品を鑑賞し自分の作品や友達の作品のよさに気付くことができる。 ◇ 少しずつ動く面白さに気付くことができる。 ★ 一人で難しい場合は教員と一緒に活動する。	◇ 友達の作品を鑑賞し、自分の見方や感じ方を広げようとしている。 ◇ 少しずつ動く面白さに気付くことができる。 ★ 一人で難しい場合は、教員と一緒に活動する。	視線、表情、動き、発声、作品

８　板書計画

めあて　アニメーションのつくり方を工夫しよう

つくり方

① シールをはる → ② 写真をとる → ③ ①と②をくりかえす → ④ 再生し、速さをえらぶ → ⑤ 完成データをおくる

★気をつけること

〇カメラとシールの台紙を ずらさない

9　成果と課題

（1）成果

①効果的なICT機器の活用

・タブレットのコマ撮り機能が、図画工作科での作品作りに有効なことが分かった。操作が容易であり、何度もやり直せることで、児童が失敗を恐れずに作品作りに集中できた。また、作った物が動画になるという達成感を味わうため、表現方法を工夫しようとするなど、意欲的な活動になった。

・連続して写真を撮影する際に、タブレットをどう固定するかを試行錯誤した。図画工作用の児童椅子を机に置く方法を採用したところ、これが効果的だった。机に固定しやすく、タブレットを置くのにも便利であった。教室内の位置によって、光の当たり方を調整することもできた。

・作品を鑑賞する際に共有ドライブにファイルを送る必要があったが、この方法を児童が習熟し、他の教科にも応用することができた。

・この単元では、出来上がった動画を作品と捉え、鑑賞では、動画を見ながら感想を言い合う活動を設定した。動画の視聴という、普段の図工とは異なった雰囲気で鑑賞を行ったことで、児童同士の意見の交流も活発なものとなり楽しめていた。

（2）課題

①　効果的なICT機器の活用

・教師がタブレットのコマ撮り機能を習熟する必要があった。例えば動画作品を全体で視聴する際に、最後が切れてしまう場面があった。最終画像を２枚撮影するよう、意識して声掛けするなど改善したい。

④ その他

・「工夫」の内容を児童が捉えられるようにする必要があった。アイデアの工夫でも、タブレットの技能の工夫でもよいことが児童に分かる発問になるよう考慮したい。「工夫」という言葉にこだわらず、友達の作品の「すきなところ」、「いいところ」を問うことも考えられる。

・制作途中に児童が自由に席を立って、友達の作品を見合ったり、工夫した点を発見し合ったりできる活動を取り入れることで、児童の伝え合う力を育むことができたのではないか。

（3）指導・講評　講師：練馬区教育委員会指導主事　　都丸 裕貴先生

○今回は特別支援学級における授業であったが、特別支援学級の児童たちも主体的に自分の考えをもって学習に臨むことは、通常学級の児童と変わらない。

○主体的な学びというのは、自分自身の学びのコントロールをしていくことである。そのためには、課題設定、見通しがもてること、振り返りの３つが大事である。また、対話的な学びとは子供同士の協働的な学びである。

○今回は図画工作の研究授業であったが、指導案の評価規準にある、造形的な見方・考え方とは何かを確認したい。言い換えれば、今回の授業ではどのような見方をすることが期待されていたのだろうか。考えられる例としては、「動物の形になりそう」、「色が変わっていくときれい」等が挙げられる。この例のようになるような教師の言葉掛けを工夫したい。

○児童観で触れられているが、自分が失敗することを極端に嫌う児童たちにとって、何度もやり直しができるという点でICTの活用がなされていたのはよかった。

○本時の目標は「簡単なアニメーション作品を工夫して作ることができる」であったが、「工夫して作る」の具体的な内容を児童が分かっていたか。どのようにすれば、工夫したと評価できたか。

○伝え合う力を育む指導の工夫として、子供の活動を教師が価値付けたり、本人の考えを説明させたりする、つまり言語化させることは非常に大切である。

○学びを深める指導を行うためには、どの児童がどのような考えをもっているのかを教師が把握し、全体発表でどの考えを取り上げたらよいか、評価規準に照らして判断することが大切である。

○今回様々な工夫を教師が価値付けていたが、ワークシートに例えば「工夫ができたシール」のようなものを貼る等の工夫があれば、もっと自信をもって発表することにつながったのではないか。
○題材についての説明で、例として「Z」の文字形を提示していた。文字というのはアニメーション的な動きの工夫につながりにくかった。文字や記号では、全部形が同じになり、動きがないので、色の工夫に留まっていた。「動物」などを取り上げると、形が特徴的であり、動きも想像されるので、色・形の工夫の他に動きの工夫も見られたのではないか。
○課題設定と見通しについて。教師の指示は、「いろいろ試してみよう」であったが、テーマを決めて行わせた方が工夫として出やすかったのではないか。お試しで様々な活動をさせる目的であったかもしれないが、最初の言葉掛けが大切で、子供にどのような作業をさせたいのかを熟慮した上で、それを引き出すような言葉で指示することが必要である。
○さらに話題にしたいこととして、「見えるものを問うのか、見えないものを問うのか」というテーマがある。例えば、教師が「何に見えるか」と聞いたとして、児童が「ヘビ」と答えた場合、これは見える物を答えているだけである。続けて「どうしてヘビに見えるの」と問いかければ、その答えを受けて、「ヘビに見えるように形を工夫したんだね」と価値付けることができる。「山や海」であれば、「どうして山や海に見えるの」と聞くことによって、「色の工夫をしたんだね」のような価値付けができる。
○振り返りについては、選択式で答えられるようにするのもよい。「活動に意欲的に取り組むことができたか」、「形の工夫をしたか」、「色の工夫をしたか」、「次にどんなことをしたいのか」などの選択肢で、ICT を活用し、理解や意思を表示しやすくなるような振り返りの方法を検討してほしい。